

1. 問題意識と研究目的

日本において学校を「学びの共同体」として再構築する主張を展開してきたのは佐藤学である。佐藤（2012）は、学びの共同体を21世紀型の学校のヴィジョンを示す概念と位置づけている。学校は、生徒が互いに学び合って成長する場所だけではなく、教師も互いに学び合って成長する場所であり、保護者や市民が学校の教育活動に参加して互いに学び合って成長する場所である。こうした学びの共同体の実現を目指した学校改革は、静岡県岳陽中学校や神奈川県浜之郷小学校などで全国的な注目を集め、今日、各地の学校へと浸透しつつある。さらに近年、学びの共同体はアジア諸国に影響を広く及ぼしつつある。

中国では、1980年代、詰め込み教育への批判から、人間の基本的な素質を全面的に高めるのを目的とする「素質教育」という教育方針を打ち出した。素質教育を強化するため、1990年から15カ年計画の基礎教育課程改革が開始された。2001年6月には「基礎教育課程改革綱要（試行）」が発表され、「受身的な学習や丸暗記、機械的訓練の現状を改め、学習者が主体的に参加し、探求を楽しむ、体を動かすことを唱導し、情報の収集、選択、処理する能力、新しい知識を獲得する能力、問題の分析・解決能力及び交流・協力の能力を養成する」ことが打ち出された。さらに、綱要に基づいて、2001年7月に各学年で具体的にどのような内容を獲得すべきかを示している「課程標準」が公表された（2011年に一部改訂）。

以上のような素質教育を背景にして、現在の中国では、いくつかの学校が佐藤学の理論的な影響を受けて学びの共同体を理念とするカリキュラムを改革しようと試みている。たとえば、上海教育学院附属学校では、質の高い教育内容を「共有」と「ジャンプ」の二つのレベルの学習課題に組織し、男女混合4人の協同的学びを実践している。また、北京豊台区第五小学校では、「一人残らず学びの主人公—探求と協同」をテーマに学校改革が進められている。つまり、「学びの共同体」は素質教育を実施していく推進力として期待されていると言える。

しかし、中国における素質教育や学びの共同体の実践を進める上で実際にいくつかの問題点が指摘されてきた。余(2013)は、基礎教育課程改革が子どもの自主学習時間の

確保を強調しているため、教師は具体的な指導、指示などなしで子どもに好きな内容、好きな方法、好きなパートナーを選ばせることにより、子どもの主体性を絶対化することを指摘した。また、侯(2005)は協同学習に対して、グループ編成の非合理性、グループ内の成員参加機会の不均等性、教師が協同学習に対する認識が足りないなどという問題を指摘した。

こうした状況を踏まえて、本研究は、第一に、学びの共同体としての学校・授業づくりがなぜ中国において受容されているのかについて、「素質教育」に着目して明らかにすることを目的とした。第二に、中国において学びの共同体の授業づくりは具体的にどのような形で展開されているのかを明らかにするために、ハルビン市の学びの共同体の実践校の授業動画や関連資料を分析し、そのうえで、学びの共同体づくりをめざす小学校における授業が抱える問題点を明らかにしようと試みた。

2. 論文の構成

はじめに

第1章「学びの共同体」の理論と実践

第1節 佐藤学の「学びの共同体」の理論

第2節 実践校での取り組み

第2章 中国の素質教育と学びの共同体との接点

第1節 素質教育の概念、特徴及び政策

第2節 素質教育のカリキュラム改革—基礎教育課程改革の6項目から「国語課程標準」を分析する—

第3章 中国における「学びの共同体」の実践校の分析

第1節 中国ハルビン市における学びの共同体の授業づくり

第2節 授業の分析

おわりに

3. 論文の概要

本研究における本論は三つの章より構成されている。

第1章では、佐藤学が提唱する学びの共同体の理論と実践について整理した。第1節では、佐藤の学びの共同体の理論的背景と理論枠組みを検討した。その中で、佐

藤の理論的な背景としてデューイとヴィゴツキーの思想の影響を指摘した。その結果、ヴィゴツキーの発達最近接領域の理論と、デューイの民主主義と対話的コミュニケーションの理論に基づく学びの共同体の学校改革は、ビジョンと哲学に基づき、その実現のための「協同的な学び」、「同僚性の構築」、「学習参加」という三つの活動システムで構成されていることが明らかとなった。第2節では、学びの共同体における三つの活動システムがどのように実施されているかについて、滋賀県立彦根西高校と浜之郷小学校を事例として取り上げ分析した。それらの事例では、教材やモノや事柄と対話(対象世界との対話)し、小グループにおいて個と個を擦り合わせ、自分の考えを表現し仲間と共有する三位一体の活動を通して協同的な学習を組織していた。また、同僚性の構築については、「組織の枠、時間の枠、空間の枠」をフレキシブルにする学校教育システムの改革と、個性に根ざした教育実践の多様性を基盤とした授業研究の改革の両面から追求していることを示した。また、通常の授業参観ではなく「授業に子どもと共に直接参加する」学習参加と、研究者、教員、院生、学部生に授業研究を開くことを目指す方向として、学校外の人々とのネットワークの核としての学校づくりを実現している点を指摘した。

第2章では、こうした学びの共同体論が中国において受容される背景について、1980年代半ば頃から登場する「素質教育」に着目して検討した。第1節では、素質教育の変遷を整理しながら、その背景や特徴、各時期の内容の重点について論じた。素質教育に関する様々な政策文書と教育研究者によって定義された素質教育の概念から、素質教育の内実は、当初の潜在的な素質を引き出すという概念から、応試教育の是正を掲げながら「主体性の重視」、「全面的な発展」、「すべての学習者に向ける」という三つの要素を重視するものになったことを確認した。特に、「主体性の重視」は、素質教育実施の重要な施策となっている。それに加え、「創造能力」と「実践能力」を育成することが強調されるようになってきた。また、政府による「調和的な社会」の推進政策によって、「平等」、「公平」、「公正」という民主主義理念が重視されていることを反映し、素質教育においても教育の質の追求と格差是正を重視するようになってきた。

第2節では、こうして発展してきた素質教育を実現するための新しいカリキュラム改革、さらに授業改革の現状について検討した。素質教育の具体的な施策として「基礎教育課程改革の具体的な目標の6項目」と「国語課程標準」を分析しながら、どのようなカリキュラム改革や

授業が学校教育の授業に求められているかを明らかにした。それを踏まえ、学びの共同体理論と中国の素質教育の接点を考察した。第一に、佐藤の学びの共同体という学校改革におけるビジョンと哲学では、学校の公共的な使命は「一人残らず子どもの学ぶ権利を実現し、学びの質を高める」ことが強調されていた。教師も校長も保護者も一人ひとりが学校の「主人公」になり、対等な関係を結んで、個人の権利を実現し、それぞれの責任と義務を負うことが強調されていた。他方素質教育の授業においても、学習者「すべて」に目を向けることが強調されている。授業においては、従来の教師-学習者間の主従的な関係ではなく、教師・学習者の間に平等な関係を築くことが重視されている。

第二に、学びの共同体における授業は、一斉授業の様式から脱皮し、子どもの個性的な学びを軸とする活動的で協同的で反省的な学びの様式へと改革されるべきであると強調している。そうであればこそ、佐藤が、いつわりの「主体性」を追求する授業における形式主義の問題、すなわち、教師と仲間との関わりや教材や学習環境と切り離し子どもの「主体性」を絶対化する問題が大きいのではないかと指摘した。この問題に対して、人の能動的な活動の前提に人や物への「対応」という「受動性」があって、そのうえ、「対応」という応答性を中心として組織された学びと授業がいつわりの主体性を超えるものであると指摘した。他方素質教育の授業においても、学習者の主体性を十分に引き出すことが重視されている。教師の役割は、学習者を助け導くことである。「知識」の習得だけではなく、「能力、態度」なども含めた全面的な「素質」を育成するとされている。

第三に、学びの共同体では、学びの活動を対話的コミュニケーションによる文化的・社会的実践として認識し、活動的で協同的で反省的な学びを組織している。「共有の学び」と「ジャンプの学び」の二つの課題の設定により、一人で達成できるレベルから他者の援助や道具の介入によって達成できる過程には発達の可能性があると考えられる。他方、素質教育の授業においても、従来の教え込みや暗記、いわゆる機械的な訓練をするものではなく、学習者の学習意欲を引き出すような啓発的授業方法、探究的な授業方法などを実施することが奨励されている。

第四に、学びの共同体における「学習参加」では、「地域と共にある学校」として地域の教育委員会との連携を築き、学校や地域の教育活動に関わることで、学校改革を推進する。他方、素質教育の授業では、学習者の日常生活と結びつきやすい題材を取り上げ、学習者が既に保有する経験や知識と関連する授業環境を作り出すも

のである。

第五に、佐藤は、学びを対話的コミュニケーションとして定義する。このコミュニケーションに関しては、対象との対話、他者との対話、自分自身との対話、こういった対話のプロセスを通じて学習は成り立つと考えられている。その中でもベースとなるのが「聴き合う関係」である。中国の『義務教育国語課程標準』の課程目標において、全ての段階で「識字と書字」、「閲読」、「作文」、「会話コミュニケーション」の4つのほかに、新たに「総合的学習」の項目が設けられた。各段階でも積極的にコミュニケーション能力の育成が重要な課題になっている。また、「会話コミュニケーション」において相手を尊重し、話をしっかりと聞くことが要求されている。

第3章では、中国において学びの共同体の授業づくりがどのような形で展開されているのかを検討した。ハルビン市A小学校の授業動画や関連資料を通して授業の様子を述べ、そして、第1章で取り上げた滋賀県立彦根西高校における国語の授業例を比較対象とし、「協同的な学習」の共通性と相違点という観点で授業を分析した。それらを踏まえ、「協同的な学習」への取り組みに対して、子どもの高いレベルの学習機会の保障、目標、学習内容と課題の設定、授業における教師と子どもの聴き合う関係という三点を明らかにした。また、子どもの学び合いを妨げる要因を、①教師の短くて適切な介入の不足、②グループ学習において、「聴く一話す」の役割分担がきちんとしていないこと、学力の低い子どもの自信の欠如、学力の高い子どもの学力の低い子どもへの不信任、というように挙げた。さらに、任・李による対話的コミュニケーションに基づく国語授業の様子を参考しながら、子どもの学び合いを効果的に用いるには、教師が介在し、学び合いのルールを設ける必要があることを指摘した。

しかし、本研究では十分に扱うことのできなかつた課題もある。本研究は、学びの共同体における協同的な学習について考察した。しかし、学びの共同体の構築には、協同的な学習だけではなく、教師同僚性の構築、保護者、地域との連携も不可欠な要素であり、各部分はお互いに影響し合う。したがって、残りの二つの部分を考察内容に入れ、学びの共同体実践校において、全般的な運営状況を明らかにすることが今後の研究課題である。

4. 主要参考文献 論文一覧

燕国材、「談話素質教育的幾個問題」、『河北教育』1996年 第4期、p.8。

ヴィゴツキー著 柴田義松訳、『思考と言語』明治図書、1962年。

国家教育委員会、『現行普通高校における教育活動計画の調整意見』、1991年。

教育部、『基礎教育課程改革綱要（試行）』、2001年。

教育部、「国語課程標準」、2011年。

教育部、『基礎教育改革を深め、素質教育をさらに推進するための意見』、2010年。

金子温、「生徒一人一人の学びを保障する授業改善を目指して—上溝南中学校の校内研究の実践と四年間の歩み—」相模原市立総合学習センター、2014年。

全国人大常委会、『中華人民共和国教育法』、1995年。

全国人大常委会、『中華人民共和国義務教育法』第3条、1986年。

佐藤学、『学びの快樂—ダイアログへ』世織書房、1999年。

佐藤学、『学校を改革する』岩波書店、2012年。

佐藤学、『カリキュラムの批評—公共性の再構築へ—』世織書房、1996年。

佐藤学、『教育方法学』岩波書店、1996年。

佐藤学『学び—その死と再生—』太郎次郎社、1995年。

佐藤学、『学校を創る—茅ヶ崎市浜之郷小学校の誕生と実践—』小学館、2000年。

佐藤学 和井田節子 草川剛人 浜崎美保、『学びの共同体で変わる—高校の授業』明治図書、2013年。

佐藤学、『授業が変わる 学校が変わる』小学館 2000年。
素質教育の概念、含意および関連理論の課題研究チーム、「素質教育の概念、内涵及相關研究」、『教育研究』2006年第2期、p.5。

ジョン・デューイ著 孫有中訳、「新旧個人主義—杜威文選」

上海社会科学院出版社、1997年。

ジョン・デューイ著 河村望訳『民主主義と教育』人間の科学社、2001年。

杉田由仁、「ジョン・デューイの公教育思想における『個性を生かす教育』」『山梨県立大学看護学部紀要』Vol.16、2014年。

鐘志賢、『深呼吸—素質教育を進行している』教育科学出版社、2003年。

侯鳳琴、「小組合作学習有効性的再思考」、国家教師科研專項基金科研成果『汉字文化卷2』2015年。

中共中央国務院「中国教育改革發展綱要」、1993年。

中共中央国務院、『中華人民共和国の国民と社会發展「九五」48計画と2010年に向けての長期的目標綱要』、

1996年。
中共中央国務院、『教育改革の深化と全面的な素質教育の推進に関する決定』、1999年。
中共中央国務院、「教育改革の深化と全面的な素質教育の推進に関する決定」、1999年。
中共中央国務院、『中共中央の体制改革に関する決定』、1985年。
唐迅「現在素質論的教育哲学思考」、『教師教育研究』、1990年第3期、p.49。
中村和夫、『ヴィゴツキー心理学』、新読書社、2004年。
任紅娟、李如雪「基于对话教学的小学语文课堂学习共同体教学模式探究」、『教学研究』2018年2月第4期、p.73。
楊銀付、「素質教育若干理論問題的探討」、『教育研究』1995年、p.3。
楊銀付、「素質教育研究述評」、『中小学管理』1996年第10期、p.9。
余開永、「基于新課程背景下的教学誤区及对策探究」、『文理导航』2013年第12期、p.30。

柳斌、「教育研究努力提高基础教育的质量」、『课程.教材.教法』1987年。

柳斌、「关于素质教育的再思考」、『人民教育』、1996年、p.6。